

中 北 海 道

現代俳句協会

会 報

84号

平成30年
12月5日発行

めているらしい。そういう意味では、人工知能と言えども、まだ当分人に依存する部分は大きいようである。今回は俳句甲子園で優勝経験のある大塚凱さんの俳句を、人工知能に学んでも



人工知能と俳句の一端に触れて
石 本 雪 鬼

この夏、人工知能と俳人グループが作った俳句の選者をさせていただく機会に恵まれた。愛称を一茶君という人工知能は北大の情報系の研究室、俳人グループは松山から水害直後にもかかわらず、もし来れない場合でも行事を遂行できるシナリオまで考え、遠路はるばる札幌まで足を運ばれた。この俳句に対する熱い思いに学びたいと思う。

人工知能は過去の膨大な数の俳句を学んでおり、一定の条件を与えられると、短時間に大量の俳句を作る。ただ、その中からどの一句で勝負するかという選句はあまり得意ではないらしい。当日、その選句過程には三名の学生さんが参加されており、彼らの活躍が人工知能の作る俳句の優劣を決

らい、以前と比べ人工知能の成績を大きく進歩させることに貢献したらしいことが、主催者から報告された。やはり、正岡子規や松尾芭蕉などの俳句を学ぶだけでは、現代俳人と戦うには充分ではないらしい。

今回はしりとり俳句対局方式で、総合点では人工知能に俳人グループが勝ったものの、対局中の最高点を得たのは、人工知能が作った、「かなしみの片手ひらいて渡り鳥」だった。俳句百年計画九月号に掲載されていた、人工知能研究を担う北大の山下倫央先生によると、今後の目標は、「席題や画像を入力すれば人間の手を借りずに、俳句の生成・選句・推敲を全自動で行う人工知能を開発すること」だそうであり、目を離せない。これまでの経緯や背景を知ることができる講演会も組み込まれ、貴重な機会に触れさせていただいたことに心から感謝したい。

平成三〇年度 俳句研究交流句会記

遠藤 由紀子

H30・9・24
於北海道立文学館

今回は初めて北海道立文学館で開催された。定刻の十二時、組織活動部の原田昌克氏の「今日は中秋の名月です」の一言と共に始まりを告げた。五十嵐秀彦会長の挨拶では、東部地震被災地へのお見舞いを述べられた後、結社を越えた句会や交流の場に参加することにより、様々な句と出会うことの大切さを話された。続いて辻協系一顧問が、前副会長四方万理子さんを偲んで功績など話された。

十二時二十分、事前投句による五四句に当日投句二句、計五六句の作品集が配布され一光五客の互選が行われた。互選結果の整理の時間を利用し、参加者五〇名の自己紹介がなされた。欠席は三名、都合により自己紹介前に三名退場された。

十三時四〇分・合評が始まる。鹿岡真知子氏の司会のもと江草一美氏、遠藤由紀子により選句者名が読み上げられた。特選を入れた

方や藤谷和子氏、白井千百氏、長野君代氏、永野照子氏、横山いさを氏らのベテランの方々の率直な講評など幅広く伺うことが出来たが、もう少し講評に重点をおくべきとの意見も出された。

十五時三五分、原田氏より成績発表。高得点九名と激励句（無点句など）八名に温かい拍手の中、五十嵐会長より賞品が渡された。

当番結社「草木舎」代表、亀松澄江氏より、会の進行方法に検討事項もあるが、次回への課題とし、皆様のご協力によって無事終了したことへの感謝の言葉で、定刻十六時に閉会となった。

外は生憎く小雨ではあったが、様々な句や人々との出会いのなか、大いに刺激を受け学ぶことの多い平成最後の交流句会であった。

幹事の方々や裏方として互選の整理などに当たられた方々に厚く御礼申し上げます。



平成三〇年度 俳句研究交流句会作品

② ジーパンに四次元の穴いなびかり 長野 君代

⑤ ひまわり佇つ戦争があつた日も 鹿岡真知子

西日背の少年の魚籠溢れをり 林 冬美

⑫ 孟蘭盆会今日はホ短調で読経 廣田 和久

⑩ ワレワレハ地球人ダヨ扇風機 阿部 満子

原爆被爆者館平和駅前夕涼み 宮下芙紗子

天命の時の無常や温め酒 佐藤 和則

なんのなんの彼の夏風邪思わでか 柏田 末子

あの人は一つ年上曼珠沙華 岡本 順子

あめんぼう雨のち晴れもあめんぼう 大河原倫子

恋びとよ水の際なる秋の蝶 安田 中彦

① 髪洗うわたしが溶けるまで洗う 平尾 知子

夏の沖杵目一つが埋まらない 倉部 仁子

生命線仄かに透けるくず桜 齋藤 嫩子

④ 平成も白い御飯も夕焼けて 藤谷 和子

⑧ 出席簿涼しく丸の並びおり 本 ゆみ

見開きに声残しおりキリギリス 中山ヒロ子

⑩ 広辞苑「ヤバイ」を載せし原爆忌 臼井 千百

銀浪や小舟ゆっくり老夫婦 伊藤 津良

鬼灯や憤怒の息も二つ三つ 遠藤由紀子

砂浜に埋める合鍵夏深し 齋藤 雅美

群衆の誰も気づかず秋の虹 齋藤 厚子

こころまで乳液の沁む夜の秋 齋藤 厚子

美瑛まで五十三キロ蕎麦の花 檜垣 桂子

広島忌ふりむきざまに白い月 井尾 良子

駅頭の群がりぶつかりあう蜻蛉 遠藤 静江

数珠くくりくくり万緑の立石寺 江草 一美

二度の癌からの生還新米食ぶ 有田 裕子

子らの手に熟す桃ともスマホとも 内野 弓子

ポンポンダリア老人会釈して過ぎる 永野 照子

幽玄の内裏風情藤村忌 平川 若菜

初夢や身は真二つのイリュージョン 金子真理子

⑨ 原子力空母入港南瓜に刃 亀松 澄江

閉校の裏山なれど粧へり 横山いさを

大きい足跡小さい足あと砂日傘 中田真知子

③ うかうかと肺に咲きたる曼珠沙華 瀬戸優理子

行幸に総出の鳥や秋の空 中田 琢志

⑥ 胎内に銀漢縄文の女神 近藤由香子

• は特選の数です。

⑦

身に入むやアイヌユカラの子守歌
葡萄大房婚前の母の糸

缶蹴りの鬼も家路へ小望月

看板に乳揉みますと敗戦忌

噴水のてっぺんをうまく説明せよ

あんなにも薄い壁一枚秋隣

押し花に花野広がり母の額

秋風鈴性倒錯者吊られけり

草の花女にありし底力

何なのだ野分け過ぎ去り鳥の群

銀漢のあふるるごとく窓に罅

まぼろしの名画であろう鱗雲

当日欠席された方の句

猛暑日にめげず実ったトマトかな

硯洗う山頭火もいいが放哉が一番

辣蕪を漬けし臭ひを持ち歩く

板金屋木槿の庭に来てをりぬ

閉山や鉄扉の好きな赤トンボ

戦後背に柩の老女夏の雲

小路 裕子

垣内 紀子

石井 美髯

青山 酔鳴

辻脇 系一

原田 昌克

東出 依子

五十嵐 秀彦

鈴木 雅美

菊池 敏子

音無 早矢

黒田 さち子

石本 雪鬼

山内 俳子洞

荒川 弘子

上田 すみ子

霜田 千代磨

白井 節子

平成31年度 総会及び新年交流会

- ・日 時 平成31年2月2日(土) PM2時
- ・会 場 すみれホテル 札幌市中央区北1条西2丁目
- ・会 費 5,000円
- ・連絡先 中北海道現代俳句協会事務局 ふじもりよしと Tel(011)641-1007

第19回 中北海道現代俳句賞 作品募集

応募要領

1. 応募作品 30句(必ず題名をつける)
未発表・既発表を問わず30句。ただし既発表句は平成30年1月以降の発表作品に限ります。また、過去の応募作品の再応募は不可といたします。
(会員以外の方も応募できます)
 2. 募集期限 平成30年12月15日消印まで
 3. 募集地域 石狩、空知、後志振興局管内にお住まいの方
 4. 応募用紙 指定の用紙を使用(会員以外の方は顕賞係へ返信用封筒に切手貼付のうえ指定の用紙を請求して下さい。〒、住所、氏名お忘れなく)協会HPからダウンロードも可
 5. 応募方法 応募料3000円(定額小替為、または現金書留にて)
 6. 顕 彰 2019年6月 北海道現代俳句大会にて
 7. 作品送付 〒069-0237 空知郡南幌町栄町1-1-12 武田方
瀬戸優理子 宛
中北海道現代俳句協会 組織活動部行
- 選 者 横山いさを、五十嵐秀彦、辻脇系一、鈴木きみえ、永野照子、
渡辺のり子、石川美智子の7氏
- 問合せ先 会 長 五十嵐秀彦 011-852-7014
顕彰係 瀬戸優理子 011-378-5110

四方さんを偲んで

もう一度会いたい!!

新出朝子

いまもあのにこやかな笑顔で、遠くから響く大きな声が聞こえてきそうです。貴女のいない俳壇はとても寂しいです万里子さん!

「万里子さんに会いに行きましょね」と内野弓子さんと話していた矢先の訃報でしたから本当に驚いています。

初対面は昭和五年でしたからもうすぐ四〇年になりますよね。所属結社は別としながらも、お会いするたびにお声をかけてくださったのがとてもうれしかったです。

月光や暴れてゐたる黒葡萄 四方万里子

かつて所属しておられた『WA』に発表されていたこの一句が忘れられません。

月光の下に露わにされた黒葡萄の強い存在感。それは俳壇における四方万里子さんご自身ではなかったかと・いきいきとご活躍されていたあの英知に溢れていた時間がたまらなく懐かしいです。万里子さんありがとうございます。

合掌

幹事会報告

平成30年7月19日(木) 18時 かでる2・7 530室
議題

1. 第27回北海道現代俳句大会 6/10報告(事務局)
2. 4地区会長・事務局長会議 6/10報告(事務局)
 - ・他地区の会員減少→4地区統一案も
 - ・30周年記念大会にむけて 4地区の年表作製案浮上
3. 俳句研究交流句会について(組織活動部)
 - ・日時 平成30年9月24日(月) 休日振替日 16時終了予定
 - ・会場 北海道立文学館 地下講堂
 - ・会費 1,000円
 - ・当番 草木舎
4. 会報 No.83(広報部)
 - ・8月3日発行予定
 - ・中現俳賞応募用紙同封予定
5. 中北海道現代俳句賞(組織活動部)
 - ・従来の用紙をA4・B4か検討
 - ・応募規定は前年度どおり
6. 三役・顧問・中現俳賞選考委員の会(事務局)
 - ・辞任意向の方の配慮
7. その他(事務局)
 - ・本部より会員数の減少危機感、ゼロ句会、青年部の再稼働を中心に対処
8. 新会員推せん/募集(事務局)
〈出席者〉五十嵐・石本・亀松・ふじもり・高島・中田・林・遠藤・金子・原田・鹿岡・瀬戸・近藤・江草・青山 以上15名

平成30年9月20日(木) 18時 かでる2・7 530室
議題

1. 俳句研究交流句会準備状況報告(組織活動部)
 - ・日時、会場、会費、当番結社に変更なし
 - ・役員は10時半集合のこと
2. 平成31年度総会及び新年会について(事務局)
 - ・日時 H31年2月2日(土) PM2時
 - ・会場 すみれホテル ・会費 5,000円
3. 第19回中北海道現代俳句賞(組織活動部)
 - ・12月15日締切、応募用紙ダウンロード可能
4. 会報 No.84(広報部)
 - ・12月上旬発行予定
 - ・一人一句集鑑賞の書き手について
5. 2019年第28回北海道現代俳句大会(事業部)
 - ・日時 2019年6月16日(日) PM1時
 - ・会場 ホテルサンプラザ
 - ・会費 5,000円→6,000円(ホテルの都合上)
 - ・講演 宇多喜代子特別名誉顧問 演題未定
6. その他(事務局)
 - ・三役・顧問・中現俳賞選考委員の会 11月4日(日) 10:00~12:00 かでる2・7 910室
 - ・中現俳賞顕彰の件 他
7. 新会員推せん・募集の件(事務局)
〈出席者〉五十嵐・石本・亀松・江草・原田・林・鹿岡・遠藤・金子・高島・青山・近藤・中田・ふじもり 以上14名

1頁〜3頁 藤谷 和子

翼が邪魔だ秋抱きしめるときも

五十嵐秀彦

思いきり季節を、ほんとは誰かを抱きしめたいのに、邪魔な翼がある。逡巡する自分の気持を翼のせいにして、邪魔だ、と言いつける。

その断定で成立している作。或いは「だ」が邪魔かもしれないが――。

そら豆の正体ゆるやかなサルトル

井尾 良子

高名なフランスの実存主義者の著作を一度も読んだことがない。あの美味しいそら豆の正体は「ゆるやかなサルトル」だという。二句一章の不思議な作を理解し感じることは、私には出来なかったが、記憶に残った作。

指切りをしただけ薔薇に触れただけ

江草 一美

だけ、だけを並べたこれも二句一章の作。だけなのを省くことで、読手の想像力を刺激する仕掛が抜群に面白い。

美しき誤植なりけり忘れ花

大河原倫子

さっぽろに空はまだある椽の花

岡本 順子

花の二句も好ましい佳句と思った。

4頁〜5頁 田湯 岬

振花やみどり児すでに発明王

かまた純子

這い這いをする頃の児なのでしょう。まだ玩具の使い方も分からないなかで、見ていると、大人では気が付かないような遊び方をしています。まさに発明王です。振花が妙にピッタリ合っていて納得。

踏むことのなき本籍地鳥渡る

小路 裕子

踏むことのなきは、踏むことが出来ないとも受け取れます。しからば、その本籍とは北方領土とか満州、或いは樺太だろうか、と思われれます。鳥渡るがとても象徴的。

月影に白きライオン浮かびたる

齋藤 厚子

白いライオンと聞けば、すぐにジャングル大帝やライオンキングを思い出します。実際にそういう情景がある訳ではないが、作者の脳裏にはそうした夢の世界が溢れているのでしょうか。白いライオンは星の王子様かも。

6頁〜7頁 長野 君代

十円玉に入る月ありわらべ歌

白井 節子

十円玉に入る月とはどんな月だろう。天心の月？真昼の空に浮かぶ真白の月？想像するだけで楽しくなる。「お月さまいくつ十三ななつ」子供の頃口遊んでいた童謡が甦ってくる。

日本語が聞きたくて流水どつと来る

鈴木きみえ

とかく荒々しさ厳しさばかりが強調され勝ちな流水だが、こんな優しい捉え方のあることに瞠目する。流水にはアムール河やツンドラ地帯の匂いが乗っているのかもしれない。十七音から溢れ出ているところ、いかにも流水らしい。

おおかみの駆け抜けた風うるう秒

瀬戸優理子

この狼、かつて日本列島の山野を駆け巡っていた「絶滅のかの狼」に違いない。なんとという懐しさ。日常のどうでもよいと思われる一秒、されど文学的意味を持つ一秒。

意外性に満ちた間合が絶妙である。

8頁〜9頁 鈴木きみえ

ダリの髭真つ直ぐ曲がる大寒波

高島 葉子

独特のダリの髭を思うと、中七の表出は無理のない俳味を感じる。季語も適切であるからこそこの句は生きていく。ダリの作品は大寒波のごとく激しい。その生涯まで見えてくる。ダリの髭に着目した手腕はさすがと思う。

振花の否応なしに振れをり

辰巳佐知子

平明な一句であるが、中七の表出に読み手は立止まる。先輩の言葉によると、左巻きと右巻きの両方があると言う。他に関係なく振れる運命にあるその花に、作者はいとしさを感じたのである。

真鴨浮く羽毛の下にパトスあり

廣田 和久

パトスはギリシャ語で快樂または苦痛を伴う感情の意で、反対語にエートスがある。羽毛の下にパトスがあると発想はユニークであり、句意の深さにひかれた。

炎天の砂丘や駱駝に座り胼胝

福田 元子

実際に砂丘に立って生れた句である。座五の発見は見事である。熱砂の中をもくもくと行く駱駝の列、唄の節が浮かんでくる。同時に作者のやさしさも伝わってくる。

10頁〜12頁 齋藤 雅美

三冊子紙魚一族の夢の跡

松王かをり

三冊子は服部土芳が著した芭蕉俳諧の俳論書。国会図書館に写本があるらしいが古い和紙の書であれば紙魚の食み跡も当然あるだろう。芭蕉の「夏草や」の句へのオマージュといえるが、「蕉風一門の夢の跡」と解することもでき重層的な面白さがある。

着ぶくれて一足す一は二で了る

山内俳子洞

数学的な正解がない文芸の世界においては、一足す一が三にも四にもなりうる。想が広がらずに二で終わってしまったという着膨れた作者の自嘲だが、どうしてどうして三くらいにはなっている諧謔の効いた句である。

血が騒ぐ人生であれ冬夕焼

米山 幸喜

作者の年齢は承知していないがおそらく人生後期にあるものと思う。しかし、穏やかに人生の終末に向かうのではなく、最後まで血が騒ぐ人生でありたいと願うのであろう。「冬夕焼」に晩年においても輝きを求める前向きな意志を感じる。

礎

星野 一郎

略歴

一九二六年〜二〇〇九年。享年八四歳

北海道生れ。中北海道現代俳句協会会長を経て顧問。「海程」「粒」「水原帯」各同人。句集に『白い堆積』他二冊。砂川文化功労賞、北海道俳句協会鮫島賞受賞。

きさらぎの三日月が居る冷蔵庫
すっからかん大白鳥と少年と
はつなつを白濁にして牛の声
合鍵をつくるカマキリを圧縮して
雪みちは柩の幅があればいい

鹿岡 真知子 記

〔青のフロント〕 佳句抜粋

秋来たる海深くまでついた嘘

村上 海斗

骨格はきつと十字架破案山子

浅井 通江

先史時代の女神殺害豊の秋

青山 酔鳴

来る人も去る人もまた草紅葉

室谷安早子

カムイの地まだ揺れ止まず穴惑

小路 裕子

◆事務局だよ!

十月二十七日、京都での現代俳句協会平成三〇年度大会に参加した。当会の、亀松澄江副会長の読売新聞京都総局賞授賞の晴姿を拝見し、松山市立子規記念博物館、館長の竹田美喜氏による「明治二八年の子規と漱石」―愚陀仏庵の五二日―という講演を聞いた。子規の為に漱石が自宅を提供し、新しい日本の文学、文芸を興すという子規との約束を果たすために、パトロンとなり支援する過程を種々の書物、伝聞、記事などで実証したきわめて興味深い講演であった。十一月四日、三役、顧問、中現俳賞選者の会があり、長年役員・選者としてご活動頂いた臼井千百氏の退任が報告され、石川美智子氏にお願いすることになった。臼井千百氏には長期にわたり当会活動に携わって頂いたことに感謝しこの場をもってお礼を申し上げます。(ふじもり記)

第28回北海道現代俳句大会

- ・ 日時 2019年6月16日(日) 1時
- ・ 会場 札幌市ホテルサンプラザ
- ・ 講演 宇多喜代子氏 演題未定 (現代俳句協会特別顧問)
- ・ 懇親会費 6,000円

会 員 動 向

会員数 131名
(平成30年11月30日現在)

発行人 五十嵐秀彦
 発行所 中北海道現代俳句協会
 〒064-0952 TEL 011-641-1007
 札幌市中央区宮の森2条8-1-18
 ふじもりよしと方
 編集人 江草 一美
 〒003-0838 TEL 011-874-3049
 札幌市白石区北郷8条3-6-36-703
 青山 醉鳴
 〒061-1354 TEL 090-3398-3457
 恵庭市島松旭町4丁目9-1 早川方

「青のフロント」句会のご案内

日時 偶数月 第2土曜日13~16時
 場所 かでる2・7
 席題 1句 当季雑詠2~3句
 問い合わせ先
 五十嵐秀彦 (011) 852-7014

会費納入のお願い

本年度からは振込手数料を会員の皆様に御負担願うことに致しました。宜しくお願ひします。

中北海道現代俳句協会

編集後記

会場を文学館に移した俳句研究交流句会。新たな運営方法ながらも組織活動部と当番結社、参加者各位のご協力で無事終了。課題は次年度に活かす糧とし、皆さまに深謝。北現俳・鈴木牛後氏の角川俳句賞受賞は北海道の俳句界にとってもうれしく、瞠目。心よりのお祝いを惜しみなく。(青山醉鳴)

編集、浅井通江氏の北海道新聞俳句賞佳作受賞の報が入った。会員各位の実力顕著な一年だったと共に、金子兜太名誉会長、当会の鈴木光彦、水谷郁夫両元会長、四方万里子元副会長が御逝去の一年でもあった。『ひそやかに服喪のころ年暮れぬ』(蛇笏)。会員の皆様、どうぞ良い御年をお迎え下さい。(江草)